

『夜の寝覚』の石山の姫君

——藤・撫子のイメージと『源氏物語』引用——

赤 迫 照 子

石山の姫君と明石の姫君

『夜の寝覚』の登場人物には、様々なレベルで『源氏物語』の登場人物の要素やイメージが取り込まれている。寝覚の女君（以下、「女君」と男君の長女石山の姫君の場合、その人物造型の基盤にあるのは明石の姫君である。坂本信道氏が指摘されたように¹⁾、都以外の地で誕生し、母親から離されて成長すること、春宮に入内、立后し、国母として一族の榮華を支える役割、祖父・母譲りの楽才等、石山の姫君は明石の姫君に酷似する。表現レベルの一致も見られ、例えば、石山の姫君の形容「夜光りけむ玉はかくや」（巻二・一五五²⁾は、明石の姫君の「夜光りけむ玉の心地して」（松風・二・四〇三³⁾を引いている。石山の姫君のもつ藤のイメージもまた、明石の姫君を髣髴とさせるものである。

〔1〕①藤の衣六ばかりに、紅の打ちたる、青朽葉の織物の袿、撫子の唐衣、薄物の裳、宿植物に白き唐綾の袿五、女房二人、童一人、下仕へ、はしたもののきよげなるなど、日やすきほどにした

てて、渡したまふ。少将の君は御送りに参る。唐撫子の衣五ばかり、藤の織物の袿、若楓の唐衣、裳は同じ薄色、扇なども心あるさまなり。
(巻二・一五四)

②藤の濃き薄御衣、青朽葉の御小袿を着たまひたる、はなやかにらぬ御衣のあはひなれど、着たまひたる人がら、こたかき岸よりえならぬ五葉にかかりて咲きこぼれたる朝ぼらけの藤を、折りに見る心地して、うち引かれたる裾、袖口まで、今から心にくく、なまめきたる気色したまひて、いささか、いはけ、あふなきことまじらず、よいおとなのやうに、用意あくまでありて、御かたちのいみじうにほひやかに、うつくしげなるさまは、唐撫子の咲ける盛りを見むより、もげなるに……
(巻四・三七五〜六)

①は乳母達の衣装描写である。石山の姫君を引き取りに来る男君を迎えるため、女君の兄宰相中将が乳母達に準備したのは藤の衣装であった。②は女君と再会した翌朝の石山の姫君である。藤の衣を纏った石山の姫君は、その美しさを藤に喩えられている。これらの描写が、明石の姫君の、

〔2〕①これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし、と思ひよそへらる。

(野分・三・二八四〜五)

②よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりてかたはらに並ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞしたまへる。
(若菜下・四・一九二)

といった藤の比喻を下敷にしているのは明らかであろう。

撫子のイメージをめぐって

ところで、石山の姫君には藤だけではなく、「1」①②波線部のように、撫子のイメージも付与されている。男君が女君に送った文においても、石山の姫君は、

「3」うつるばかり赤き紙に、撫子を折りて包みて、

よそへつつあはれとも見よ見るままに

と、やはり撫子に擬されている。
にほひにまさるなでしこの花 (巻二・一六九)

女君と男君は四人の子を儲けたが、中でも第一子石山の姫君は特別な存在である。九条でのただ一夜の契りによって誕生した石山の姫君は、女君と男君の縁の深さの証であり、同時に、妻の妹―姉の夫という、結ばれてはならない二人の仲を繋ぐよすがであった。いうまでもなく、撫子には「ふた葉よりわがしめ結びし撫子の花の盛りを人に折らすな」(『後撰集』巻第四 夏 一八三 よみ人しらす)のように、「愛しい子」の意味がある。「1」①は子別れに備える場面であり、②は①の出産直後以来、約十年ぶりの母子再会の場面であるから、「1」①②や「3」の撫子には、女君・男君から注がれる愛情の深さが表現されているのであろう。

『源氏』との関連という観点から見れば、「3」は『源氏』、源氏が藤壺の宮に送った歌、

「4」常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、…(略)：

よそへつつ見るに心は慰まで

露けさまざるなでしこの花

(紅葉賀・一・三三〇)

の引用で、「寝覚めの御仲らひ」に源氏と藤壺の宮の禁忌の恋が、石山の姫君には撫子によそえられた冷泉帝の、「許されない恋によって誕生した子」というイメージが重ねられている。

「愛しい子」という和歌的発想を基にしながら、撫子に喩えられる『源氏』の登場人物といえば、もう一人、玉鬘がいる。

「5」① 山がつの垣ほ荒るともをりをりに

あはれはかけよ撫子の露 (帯木・一・八二)

②かの撫子を忘れたまはず、もののをりにも語り出でたまひしことなれば、… (蚤・三・二一八)

③撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、難いとなつかしく結びなして、… (常夏・三・二二八)

④「撫子を飽かでもこの人々の立ち去りぬるかな」(同二三三)

⑤ なでしこのとこなつかしき色を見は

もとの垣根を人やたづねむ (同)

⑥ 山がつの垣ほに生ひしなでしこの

もとの根ざしをたれかたづねん (同)

玉鬘は①夕顔の詠歌を元に、父内大臣や源氏によって撫子によそえられている。源氏は雨夜の品定め折に聞いた①を記憶しており、

その話を玉鬘に語ったのであろう、玉鬘も⑥のように、自身を撫子によそえて歌を詠んでいる。

蜚蜚、弘徽殿女御は立后でまず、春宮妃にと目論んだ雲居の雁は夕霧と不祥事を起こし、内大臣の後宮政策は挫折していた。源氏の娘明石の姫君に対抗し、春宮妃候補を立てるべく、内大臣は②「かの撫子」玉鬘の搜索を始める。藤氏は、藤壺の宮、秋好中宮と、皇族に中宮の座を奪われてきた。今度こそ我が娘を中宮にと、内大臣は②「かの撫子」に望みをかけたのであった。

関白左大臣家の事情

実は、石山の姫君を引き取る直前の関白左大臣家は、『源氏』の内大臣家と似たような状況にあった。関白左大臣家の一人娘は中宮となり、中宮が産んだ皇子は立坊した。だが、その春宮に入内する女子がない。「男君二人、女はただ中宮一所おはします」（巻二・一六四）という関白左大臣家では、当然、長男男君に子作りへの期待が寄せられる。中宮に続く后がねの誕生を待ちわびる関白左大臣の焦りは、幾度も述べられている。

〔6〕①「さばかり、いかなる海人の子のもとにありとも、中納言子と名のり来る者あらば、と願ひおぼすに、…」（巻一・六三三）

②「大殿の、『中納言殿の御子をとく見むとてこそ、尋ねしか。

まださる気色のなきにやあらむ。いみじく口惜しき際なりとも、

この人の子とだに名のり出づる人あらば、人のそしり、もどき

知るべくもあらず、数まへ、ものめかさむ』とのたまふなりとて…」（巻一・七八〇九）

③「殿、上、我が心にもまかすまじきものを、今までと度」ここにさいなむものを、…」（巻一・九三三）

④「一日も、殿の、『二十がうちにまうけつるこそよけれ。今まで子をまうけざめるが口惜しきなり。こころさぶらふ女房のなかに、中納言子と名のり出づるがあるまじき』とのたまひしものを。聞きたまひて、いかに忍びもあへずおぼしよろこばむ」

（巻一・九五〇六）

⑤「夜昼嘆かせたまふ殿に、あづけたてまつらむと思ふを…」

（巻二・一四二一）

⑥「うち聞くよりいとうれしげに笑みて、『遅くもと、いと心もとなく見たてまつるに、かるうじて、かひあることをもつけたまはるかな』

（巻二・一四一〇）

⑦「わりなきことを、つねに勘当せさせたまふがかしごさに、御願ひのままなるものをこそ、見たまへ出でではべれ」

（巻二・一六一〇）

「母親の身分はどんなに低くてもかまわぬ。とにかく、二十歳までに子どもを作れ」という関白左大臣の嚴命は、①但馬守や②対の君も知っていた位であるから周知のことなのであろう。関白左大臣の苛立ちは激しく、新婚数ヶ月であるのに、②「孫が早く欲しいから結婚させたのに、まだ大君は妊娠しないのか」とまで言い放った

という。それ程までに関白左大臣が苛立つのは、事情があった。

原本本に春宮の年齢は明記されていないが、改作本の末尾、石山の姫君の春宮入内の条に「とうぐう、ことし十九にならせ給ふ。ひめ君十一になり給へば」(五・五五五⁵)とある。ただし、入内時の石山の姫君の年齢は年立からいつて「十一」ではなく「十三」とあるべきで、それを考慮して計算すれば、石山の姫君誕生時(物語第五年目)、春宮は七歳。原本本には物語第四年目に「春宮は、まだ児にておはします」(巻一・二二)という記述がある。物語第四年目、春宮は六歳であるから「児」だといえるので、原本本と改作本の春宮の年齢設定は同じ、もしくはほぼ同じと見てよいだろう。

関白左大臣家には中宮の他に娘がいないが、関白左大臣の弟老閔白(石山の姫君誕生時は左大将か)は三人も娘を儲けていた。三姉妹の年齢について、改作本には物語第八年目(もしくは七年目か)に、「十二、十、なつばかりにて」(三・四五三)とある。こちらも原本本における姉妹の描写等を見る限り、原本本と改作本の年齢設定は大きく相違するとは思われない。いずれの姫君も春宮の年齢とつり合う。先に老閔白家の姫君が春宮に入内し、皇子を産めば、関白左大臣家の外戚としての権勢は低下せざるをえない。関白左大臣家には、もはや、女子誕生まで一刻の猶予もならないのである。

交錯する藤と撫子

そのような状況下にあつて、石山の姫君は関白左大臣家に迎えら

れたのであつた。関白左大臣や北の方は「思ふさまに女にてさへおはするうれしき限りなきに」(巻二・一六四)と歓喜するが、それにしても、関白左大臣家程の権門が「6」①②④と母親の身分を不問に付したり、石山の姫君を迎えた後も、出生の事情をたいして追及しないというのは少々違和感がある。例えば『源氏』の明石の尼君が「劣りの所には、人も思ひおとし、…」(薄雲・二・四三〇)と、姫君を紫の上に預けるよう明石の君を諭しているように、実母の身分がそのまま姫君の評価に反映されるものであつたのを思えば、関白左大臣と北の方が世間体を気にせず、「さはれや、言ふかひなき際なりとも、めづらしく差し出でたる、いとうれし」(巻二・一六二〜三)と片付けてしまふのは不自然である。母親を秘さなければならぬ石山の姫君が、ただひたすら歓迎されるという展開は、「6」①②④と、関白左大臣のなり振り構わぬ態度の強調によつて実現されたが、それにしても、新妻大君の妊娠を期待する記述がないまま、「6」②のような発言があらわれるのは唐突である。

この不自然については指摘したことがある。⁶『寝覚』第一部は『源氏』夕顔物語を多く引用し、「6」①「海人の子」も、夕顔の、「7」「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさまいとあいだれたり。

(夕顔・一・一六二)

を引く。そこで「6」①「海人の子のもと」は、夕顔の許で育つた玉鬘ということになり、「海人の子のもと」でもいから名のみ出る者があれば…」と願う関白左大臣には、玉鬘を捜し出そうと尽力す

る『源氏』の内大臣の姿が重ねられてくる。展開上に生じた多少の不自然が、『源氏』引用によって醜化されるという『寢覚』の方法であった。

では、「海人の子のもと」と同様に、石山の姫君にまつわる撫子のイメージの基底にあるのは玉鬘ではないだろうか。左大臣関白家の切り札としての石山の姫君の存在感が、内大臣の悲願を叶えてくれるはずであった玉鬘になぞらえられていると見てみたい。

河添房江氏⁷⁾は、石山の姫君に藤のイメージが付与され、明石の姫君に相似した描写がされることによって、『寢覚』が内在する明石一族の物語、すなわち、音楽伝承譚と皇統接近としての物語構造が顕在化するとされた。祖父源氏太政大臣の皇統接近の夢を実現に導く、后がねとしての藤のイメージ。そして、『源氏』内大臣家と似た事情を抱える『寢覚』関白左大臣家の、待望の春宮妃候補としての撫子のイメージ。『源氏』の想像力に依存し、生成したイメージを様々に交錯させながら、『寢覚』は石山の姫君を造型している。

〔注〕

- (1) 坂本信道氏「音楽伝承譚の系譜―『源氏物語』明石一族から『夜の寢覚』へ―」(『文学』第56巻4号 昭63・4)。
- (2) 『夜の寢覚』本文の引用は新編日本古典文学全集により、末尾の(一)内に巻・頁数を付記し、傍線を私に付した。
- (3) 『源氏物語』本文の引用は新編日本古典文学全集により、末尾

の(一)内に巻名・巻数・頁数を付記し、傍線を私に付した。

(4) 和歌の引用は『新編国歌大観』により、私に表記を改めた。

(5) 改作本文の引用は「鎌倉時代物語集成」第六巻『夜寢覚物語』(笠間書院)により、末尾の(一)内に巻・頁数を付記した。

(6) 拙稿『夜の寢覚』における夕顔物語引用の方法―「身分違いの恋」という装い―(『更級日記の新研究―孝標女の世界を考える―』新典社 平16)。

(7) 河添房江氏「源氏・寢覚の花の噺」(『源氏物語の噺と王権』有精堂 平4)。

――あかさこ・しょうこ、広島文教女子大学非常勤講師――